

埋文センターニュース

第 5 号

1997. 3. 31

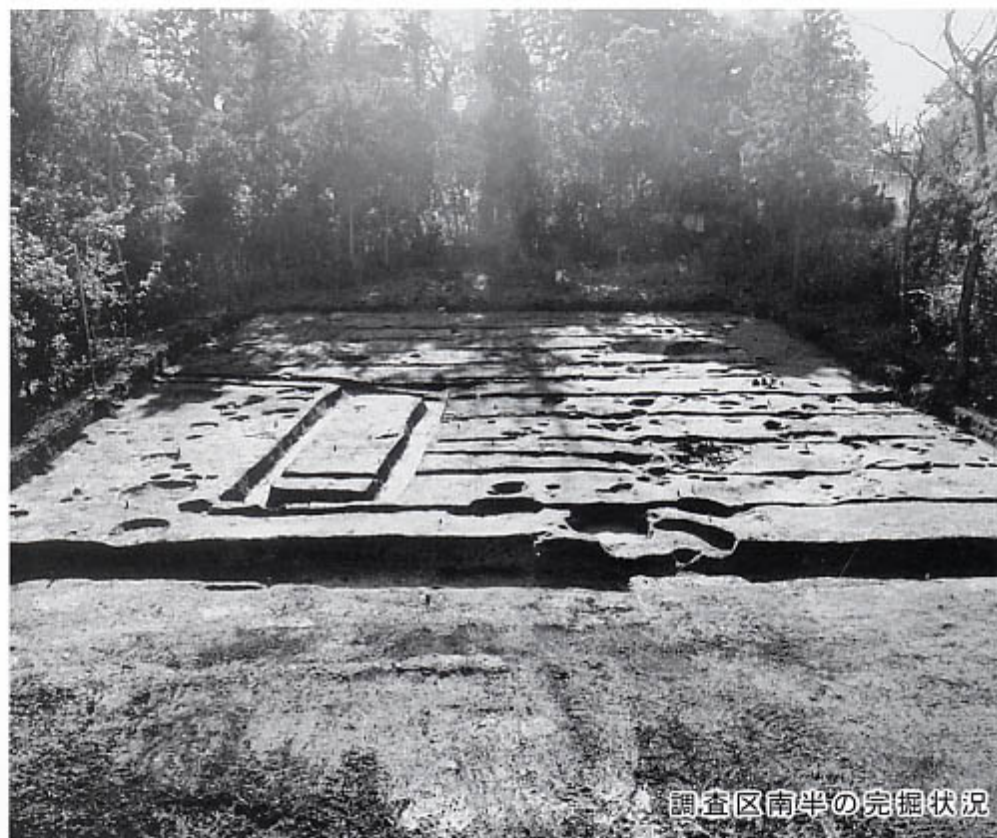
津市埋蔵文化財センター

高田
本山

専修寺
境内で

発掘調査

を
行いました。



調査区南半の完掘状況

「津市内で一番大きな寺はどこ？」と尋ねられれば、市民の誰もが「高田本山^{たかだほんざん}」あるいは「専修寺^{せんじゅうじ}」と答えることでしょう。それほど有名な、そして大きな寺院の一角で今、発掘調査を行っています。

昨年10月下旬から開始した調査は、調査区域の南半分の調査を終え、折り返し点といったところです。現段階では東西方向に走る溝のほか、井戸、柱穴などを確認し、多数の瓦片の出土がありました。これらの多くは江戸時代～近代にかけてのものです。

さて、江戸時代の中頃、宝暦年間に描かれた絵図をみると、現在は雑木の生い茂るところであったこの場所が、かつては庭園の一部

として描かれていることがわかりました。池がめぐり、築山や建物がある。こうした描写が実際にはどのよう



宝暦年間木版絵図（一部）左上隅が調査場所

なものであったかを確認し、記録すべく発掘調査は開始されたのでした。現在のところ建物としてまとまるものは不明ですが、試掘調査では調査区北部にかつての池の一部と思われる落ち込みを確認しており、今後の調査の進展に期待がもたれます。（中村）

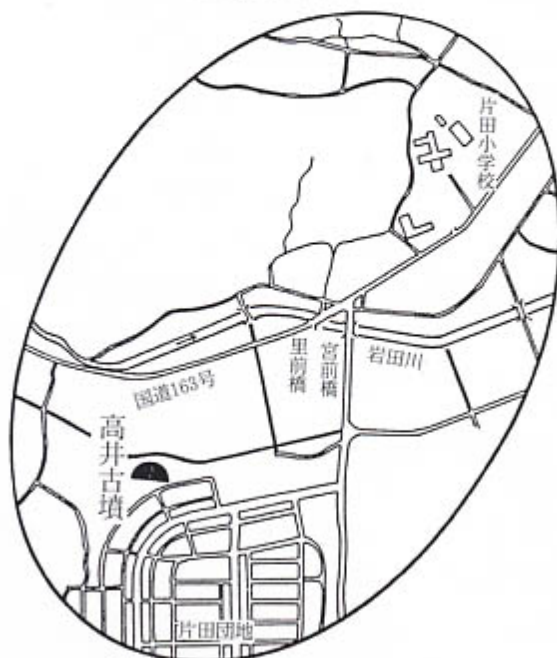
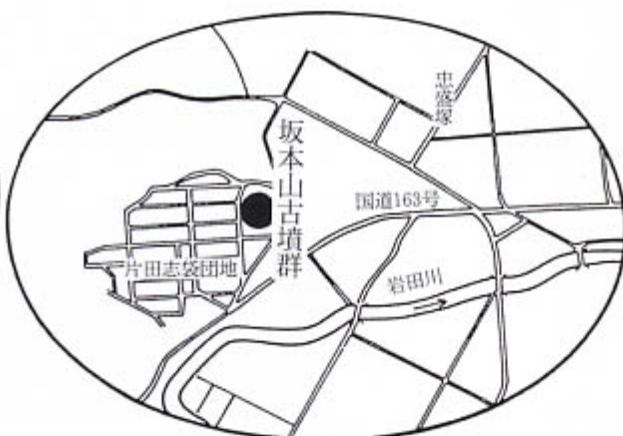
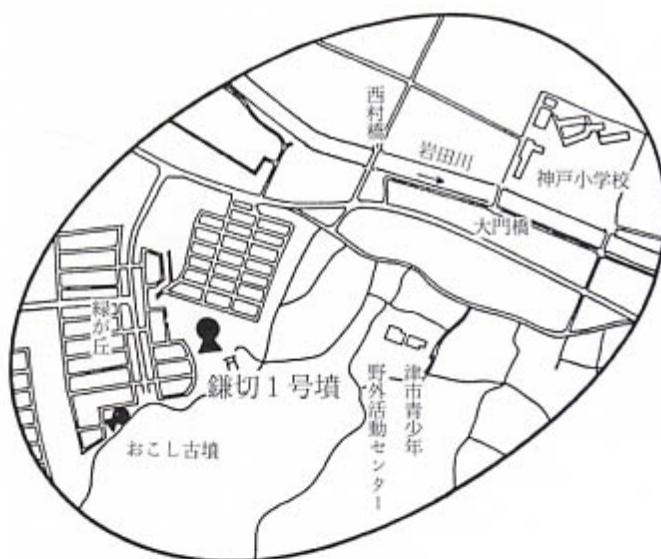
文化財顕彰板の更新進む



津市教育委員会では、平成4年度より市内にある文化財顕彰板の新設と更新を行っています。埋蔵文化財関係では、平成7年度に池の谷古墳（大字垂水）と津城跡（丸之内）の

顕彰板を更新しましたが、平成8年度は鎌切1号墳（大字野田）、高井古墳（片田井戸町）、坂本山古墳群（片田志袋町）の顕彰板を更新しました。新しくなった顕彰板は、従来のものよりサイズが大きくなり、解説文のほかに写真や図を載せていっそうわかりやすくなっています。いよいよ桜の季節となりましたが、うららかな春の一日を市内の歴史散歩に出かけてみてはいかがでしょうか！

なお、遺跡の見学に便利な埋蔵文化財ハンディーマップは津市埋蔵文化財センターと津市教育委員会文化課（津市役所7階）で無料でお頒けしています。



顕彰板が新しくなった古墳の位置

平成8年度 埋蔵文化財発掘技術者専門研修「保存科学課程」に参加して

わたしは、昨年11月7日から21日にかけて奈良国立文化財研究所で開催された「保存科学」研修に参加する機会を得ました。今回の研修の受講者は、北海道から長崎県まで全国各地で発掘調査や博物館業務に携わる18名、そして韓国国立文化財研究所から研修で来日されている1名を加えた計19名でした。受講者はそれぞれ保存処理の施設はあるがそれをいかに稼働させるか、あるいは、発掘現場での脆弱遺物の^{せいじやく}取り上げ方法はどうか等々、研修での習得目的には様々なものがありました。

今までわたしは、「保存科学」と聞けば、出土遺物を劣化させないように理化学的な手法を施す「保存処理」と同一視していたように思います。出土遺物に対する保存処理の技術的な方法の習得ができれば、との思いで研修初日を迎えたのでした。

こうした自分をまず待っていたのが今回の研修の資料、分厚い一冊の冊子でした。中を開けば、かつてどこかで見たような元素記号や化学式、そして意味不明な図表のオンパレード。出土遺物同様、かなり劣化した我々の(自分だけ?)頭脳には、その後の2週間を暗示させるに十分な内容が詰まっていました。こうして研修はスタートしたのでした。

研修は、大きくは講義と実習の2本立てで

行われました。講義では出土遺物の構造や材質調査の基礎的な理論や観察方法などが解説され、出土遺物のもつ情報をいかに抽出し、それを読み取り、それに対して適切な処理を施すかという点で、各講義の統一が図られていたと思います。また、実習ではX線照射装置を用いてのレントゲン撮影や蛍光X線分析、木製品に対する種類の異なる処理法、そして土層転写などを実際に行いました。

遺物の分析や保存処理を行うには、大がかりな設備を必要とするものが少なくありません。それらを調達するにはかなりの経費が必要となります。また、我々自身も分析や保存処理に専従できる状況にないのが実状です。今回の研修では、こうした現実のもとなんとか出土遺物を壊さずに保存できないものかと各地から集まった受講者同士が昼夜を問わず様々な情報交換を行えたこと、そして研修を担当された教官の方々と交流を持てたことも大きな収穫となりました。

研修初日、「保存処理を外部委託する時にその仕様書が書けるように」「電話でも保存処理の話ができるように」との教官の話、費用と時間の必要な保存処理での小さな組織の実際的な対処法ではないかと実感します。分厚い資料と講義ノートをその都度開いては、今後に生かせればと思っています。(中村)



蛍光X線分析装置に関する講習



土層転写の実習

遺跡紹介④ 坂本山古墳群・坂本山中世墓群

坂本山古墳群・坂本山中世墓群は、津市片田志袋町字坂本にあります。現在この辺りは住宅団地になっていますが、それ以前は草木の茂る丘陵でした。この丘陵に古墳があることは昭和13年頃に推定されており、その後7基の古墳が確認されました。

発掘調査のきっかけとなったのは、昭和40年頃から始まった団地造成計画です。調査の結果、古墳は全部で9基あったらしいこと、中世においても墓地がつくられていたことがわかりました。

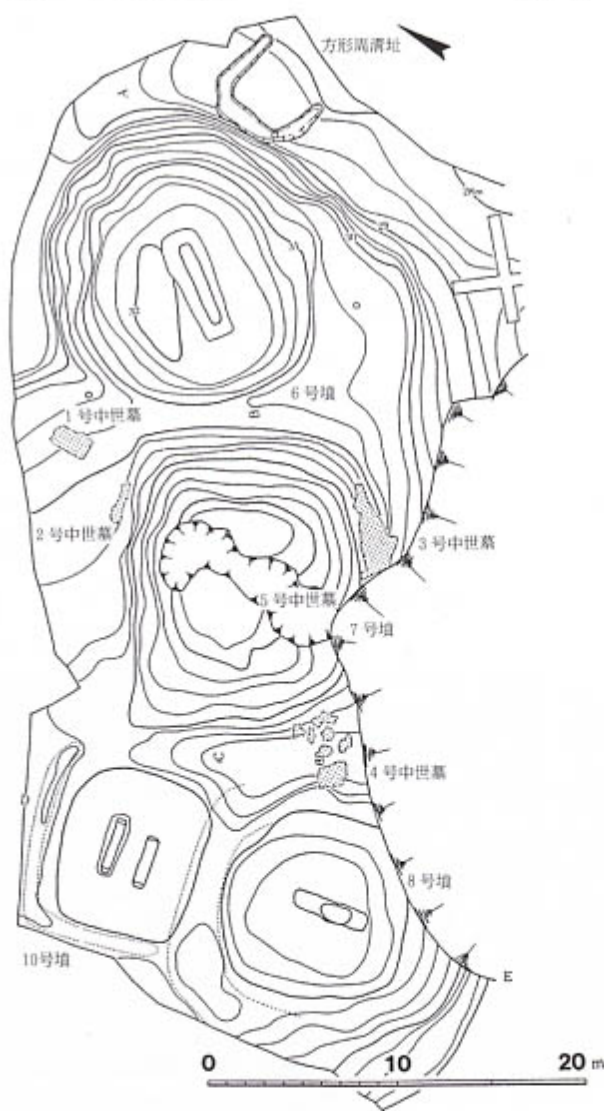
坂本山古墳群は、現在のところ津市最古の古墳と考えられており、①墳形が明確なものはすべて方墳であること、②副葬品が少量の鉄製品のみであり、装身具類、土器類を伴わないこと、などの特徴をもつ古墳群であることが確認されました。この古墳群がある安濃

川流域には弥生時代から古墳時代にかけて方形の墳墓が多数築かれており、時代を超えて受け継がれた方形墳墓の系譜のようなものがあるかがわかります。

坂本山中世墓群は古墳の発掘調査中に発見されました。7号墳の墳丘上とその周辺の4箇所に集石があり、それぞれの集石の下に数箇所の墓坑が掘られて、その中に蔵骨器が埋納されていました。一見して火葬墓と考えがちな状況ですが、人骨鑑定の結果は意外にも土葬骨が多く、また、大人と子供を1つの蔵骨器に納めるなど、興味深い事実が多数明らかになりました。(山口)



2・4・5号墳は保存され、古墳公園となっている。説明板も新しくなった。



にわとりがた 遺物紹介④ 津市出土の鶏形埴輪

埴輪には、円筒埴輪と形象埴輪の2種類があります。このうち形象埴輪には家形埴輪のほか、甲冑・蓋などの器財埴輪、巫女・武人などの人物埴輪、そして馬・鶏などの動物埴輪がありますが、ここでは津市内から出土した鶏形埴輪について紹介したいと思います。

鶏がいつから日本にいたのか、詳しいことはよくわかりません。しかし、弥生時代の遺跡から鶏をかたどった土製品や木製品が出土していることから、このごろにはすでに飼育されていたと考えられています。鶏は『古事記』の天岩戸神話にも登場しますが、時を告げる鳥、朝を告げる鳥であることから、古代の人にとっては死者の再生にかかわる鳥として考えられていたようです。

鶏形埴輪は動物埴輪の中で最も早く出現したもののひとつで、その時期は4世紀後半頃といわれています。5世紀になると、近畿地方で盛んに作られるようになり、以後、埴輪が消滅する直前（近畿地方では6世紀前半頃、

関東地方では6世紀末頃）まで作り続けられました。近畿地方で作られたものは雄鶏が多いのに対して、関東地方のものは雌鶏とみられるものが多く出土しています。

津市内では3カ所の古墳（殿村1号墳〈大字殿村〉、門脇北古墳〈河辺町〉、稲葉5号墳〈大字野田〉）と藤谷埴輪窯跡群〈大字半田〉から合計6個体の鶏形埴輪が出土しています。殿村1号墳と門脇北古墳は5世紀後半、稲葉5号墳と藤谷埴輪窯跡群は5世紀末から6世紀初めのものですが、これらの鶏形埴輪のうち、ほぼ全体の様子がわかるものは稲葉5号墳から出土した2個体のみです。

さて、下の写真は稲葉5号墳から出土した鶏形埴輪で、左のものは頭部がまったく見つからなかったため復元してあります。非常によく似ていますが、左のもののほうが尾の部分などがやや大きくなっており、こうしたところにも雄鶏と雌鶏の違いが表現されているようです。（村木）



稲葉5号墳から出土した鶏形埴輪

埋文センターこの1年

早いもので、津市埋蔵文化財センターがオープンして3回目の春がやってきました。最近、大規模な調査は少なくなったため、以前のように調査担当者全員が年中現場に出ているというようことはなくなりましたが、ここ1年ほどの開発協議の件数は確実に増加しており、試掘調査が一時に集中するということも



山王遺跡現地説明会

起こりました。

さて平成8年度も、いくつかの事業がありましたが、発掘調査関係では山王遺跡、四ツ野遺跡、専修寺境内遺跡で本調査を行ったほか、10件ほどの試掘調査を行いました。

普及活動関係では、現地説明会を開催したほか、各種の講座へ講師の派遣を行いました。また今年度のセンターの来館者は、小学校の遠足や公民館主催の講座をはじめとして500人あまりにのぼりましたが、夏休みの期間には自由研究に取り組む小中学生の来館が相次ぎました。また、9月には津ケーブルテレビの市政ガイドで埋文センターの業務概要が紹介され、発掘調査や整理作業の様子を市民の方に知っていただくことができました。

センター日誌抄

平成8年

8月24日 山王遺跡現地説明会 約60人

9月30日《見学》橋北公民館 約40人

10月2日《見学》橋北公民館「寿大学」
約30人

10月2日～3日

所沢市立埋蔵文化財調査センター

北上市立埋蔵文化財センター

を視察

10月8日《見学》津市教育研究会
社会科部会 約30人

10月9日《講師派遣》片田公民館「寿大学」

10月26日《見学》津のルーツを探る会

約50人

11月1日《見学》上浜町6丁目老人会

約30人

11月6日《講師派遣》神戸地区老人会「寿大学」

11月20日《見学》敬和公民館・南郊公民館

約30人

11月21日《視察》神奈川県大和市 4人

《編集後記》

寒かった冬が終わり、春がやってきました。去年の秋以降も天候は安定せず、雨の日が多くて、発掘作業は遅れがちでした。平成9年度も、すでにいくつか調査が予定されていますが、今年こそは天気の良い日が続いてほしいと祈る今日この頃です。 〈村〉

発行日：1997. 3. 31

編集・発行：津市埋蔵文化財センター

〒514 三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

印刷：伊藤印刷株式会社